ひととき December 2025

Contents

［特集］

幸せの黄色い新幹線

24 **座談会** 私たちもドクターイエローを愛しているんです 構成＝恵 知仁

31 **コラム1** 私とドクターイエロー 2016年の「幸せの黄色い新幹線」 談＝村井美樹

32 **紀行** 会いに行こう！ 歴代ドクターイエローを訪ねて白山、名古屋へ 文＝清田勝哉

38 **コラム2** 私とドクターイエロー 「黄色への想い」 文＝福田哲夫

41 幸せの黄色い新幹線〔案内図〕🎁

今年1月、ドクターイエローT4編成のラストランが行われた。多くの人に囲まれて、夕暮れの新大阪駅に入線

14 **特別企画** 文＝中川道夫
“昭和発祥の地” 葉山と山口蓬春

46 **奈良、美味時間** 旅人＝美村里江 文＝倉橋みどり
奈良に乾杯！ こころ潤すクラフトビール［奈良県宇陀市ほか］🎁

9 **京都の路地 まわり道** 文＝千 宗室
山あいのすき焼き

11 **ひとときエッセイ「そして旅へ」** 文＝齋藤陽道
風土に宿る手話とともに

13 **古書もの語り** 文＝内堀 弘
『も、ちどり』

16 **Interview しなやかな挑戦** 文＝森 綾
麿 赤兒［舞踏家・俳優］

43 **柳家喬太郎の旅メシ道中記**
「むさし」の「若鶏むすび」弁当

44 **地元にエール これ、いいね！**
小代焼［熊本県荒尾市］

50 **建築トライアングルツアー** 文・画＝宮沢 洋
瓦がつなぐ古都の景観［奈良市］

54 **おいしいもんには理由がある** 文＝土井善晴
大阪の味と昆布と［大阪府大阪市、堺市］🎁

60 **サンキュー！ マイ★スター** 文＝サンキュータツオ
製炭師・木戸口武夫

64 **旬** News & Topics

65 **美** Art & Entertainment 🎁

66 **遊** Event & Festival

68 **旅の小箱 from JR東海、JR西日本**
「おいないさ、伊勢」キャンペーンが開催中

70 平安時代の祈りを受け継ぐ「春日若宮おん祭」へ

71 クリスマスを彩る、とっておきのケーキ

72 新年を彩る和洋のおせち特集

73 「はなあかり」車両で行く 冬の北近畿・山陰 カニ料理満喫の旅

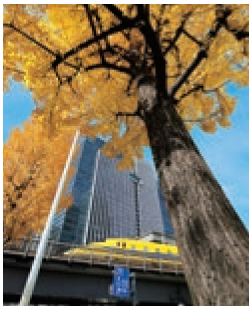
74 奈良の美と歴史を乗せて 〜特急「まほろば」新編成「悠久」登場！〜

75 華道家・写真家 池坊専宗 560年の地層、美しさの素を辿って

76 **ひととき倶楽部** 🎁 読者からのお便り 今月のプレゼント など

78 **次号のお知らせ**

80 **東海道・山陽新幹線時刻表**



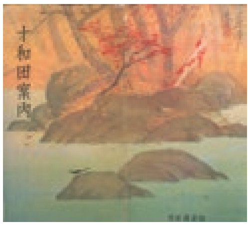
見事な黄色に色づいたイチョウの後ろをドクターイエローが走る。東京ー品川間にて
写真＝村上悠太（上も）

🎁は読者プレゼントがあるページです

※本誌に掲載している施設やイベント等の情報は2025年10月現在のものです。
お出かけの際は現地にお確かめください。また、価格のうち特に表記のないものは税込です

特別展　「昭和100年！旅する蓬春」

山口蓬春記念館の初冬の特別展。昭和の初期、蓬春は当時の鉄道省から依頼を受けて国内の名所を描き、それらが今でいうインバウンド誘致のためのポスターや絵葉書に使われた。昭和100年にちなみ、日本各地を歩いた蓬春の足跡と、昭和初期の画風の変遷を紹介する。
会期：11月22日(土)～2026年1月25日(日)



《十和田案内》山口蓬春記念館蔵

[特別企画]

“昭和発祥の地”葉山と山口蓬春

マリンレジャーと移住人気に沸く三浦半島の付け根にある、神奈川県葉山町。今から約100年前、「昭和」が産声をあげたのは、明治天皇が建てた御用邸があるこの葉山だった。御用邸の周辺には別荘文化が今も残り、日本画家として名高い山口蓬春とその記念館も、連綿と続く葉山の文化の流れの中にある。

写真・文＝中川道夫 Nakagawa Michio

豊かな自然から得た創作力

葉山町は6つの地区からなり、海側の一色、堀内、下山口の3地区は浜際とも呼ばれる。

一　山はみどりに海青く
　遠見の富士はけざやかに
三　町のまほろば一色に
　宮居しずまる御用邸

1980（昭和55）年制定の葉山町歌1番と3番の冒頭には、葉山の特長と魅力が簡潔かつ格調高く読み込まれている。作詞は仏文学者で詩人の堀口大學。作曲は團伊玖磨で、葉山一色海岸にゆかりある二人だ。

一色には、海、山、光と調和する「神奈川県立近代美術館 葉山館」が相模湾に開かれて立っている。隣市の横須賀美術館とともに絶景の美術館として人気だ。一方、県道をはさんだ山側には三ヶ岡山がせまり、「山口蓬春記念館」はこの山ふところに抱かれている。ビーチの葉山しか知らない人には意外な風景だろう。

画家の山口蓬春が葉山の一色に移り住んだのは1948（昭和23）年。戦前、東京世田谷にあった自宅の設計を手がけた東京美術学校（現・東京藝術大学）の同期生で近代数寄屋建築の巨匠となる吉田五十八によって、元からあった建物に画室などが増改築された。洋画から古典的な大和絵、そしてモダニズムな日本画に転向した蓬春は、葉山一色の海山の豊かな風光から創作力を得たのだろう。ここは蓬春の終の住処になっている。

記念館の前は「蓬春こみち」と呼ばれる路地で、地産の佐島石（凝灰岩）の石垣がつづく迷路のような「こみち」だ。生垣のすきまからは洋風、和風の屋敷が見え隠れする。「垣間見る」とはまさにこのことか。周辺は往時の別邸や別荘地で、「葉山茶寮 六花」もその一角に姿を残す。

葉山しおさい公園（左）と神奈川県立近代美術館葉山館の間の小道は「しおさいこみち」と呼ばれる。向こうに明るく見えているのは一色海岸

葉山茶寮 六花 [上]平日はせいろ蒸し、土日は餃子をメインにしたランチが人気。週末はバー営業も　[下]昭和天皇の侍医頭の別邸を外観はそのまま内部を改装　住神奈川県三浦郡葉山町一色1664-1　☎046-884-9616

幸せの黄色い新幹線

新幹線電気軌道総合試験車、愛称「ドクターイエロー」。
最高時速270キロで走行しながら、線路や架線、信号などの状態をチェックする、
新幹線の安全運行を支える重要な役割を担う車両です。
明るい黄色の車体は、鉄道ファンだけでなく大人からも子供からも大人気で、
運転スケジュールが公表されないこともあり、
「見れば幸せになれる」というジンクスがまことしやかに広まりました。
今年1月に、T4とT5の2編成あるドクターイエローのうちT4編成が引退しました。
新幹線の安全を陰から支えてきたドクターイエローの
これまでとこれからを特集します。

現行のドクターイエローは、700系新幹線をベースにした923形で、T4とT5の2編成がつくられた。写真は豊橋〜三河安城間を走るT4編成

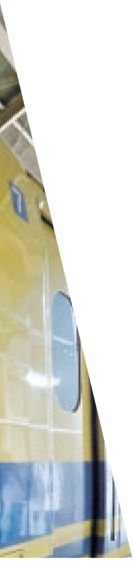
写真＝村上悠太（22〜30頁）
Murakami Yuta

座談会

私たちもドクターイエローを愛しているんです

ドクターイエローT4編成の引退が発表されたのは、2024(令和6)年の6月だった。ラストランは翌年の1月。いつもと同じように冷静沈着に乗務を続ける検測員、ドクターイエローの最後を残そうとする写真家。最後の約半年の軌跡を振り返る。

構成＝恵 知仁
Megumi Tomohito



村上悠太
写真家

板垣 伸
JR東海 新幹線鉄道事業本部

恵 知仁
鉄道ライター

恵 知仁さん（以下、恵） 「ドクターイエロー」が引退すると知ったとき、どう思いましたか？

板垣 伸さん（以下、板垣） 「幸せの黄色い新幹線」と呼ばれ、多くの皆様に親しんでいただいているアイドル的存在ですし、私もそのドクターイエローへ乗務できるとなったとき、とても幸せな気持ちにさせてもらいました。なので正直なところ、引退すると聞いたときは悲しさ、寂しさを感じました。

村上悠太さん（以下、村上） 私はこれまでさまざまな鉄道の取材をしてきましたが、ドクターイエローほど世代、性別を問わず愛された車両は、なかなかないでしょう。そんな車両が引退するのですから、これは歴史的なことだと思いました。もちろん寂しさはありましたが、ドクターイエローという名車の引退にあたり、どんな歴史的光景が待っているのだろうか――というワクワク感もありましたね。

板垣 乗務のとき、ドクターイエローの運転席からホームを見ることがありますが、すごいですよ。大勢のお客様が見に来てくださって、しかも、みんな笑顔なんです。ドクターイエローは本当に愛されているなぁと、常々感じています。

村上 いろいろな鉄道車両があるところ、老若男女からそうした注目のされ方をするドクターイエローは特殊な存在ですよね。

板垣 以前からその人気は知っていましたが、乗務してみたら、想像以上でしたよ。

村上 沿線の撮影スポットへドクターイエローを撮りに出かけると、子供連れや鉄道ファンの方々も「今日は来るかなぁ」と言いながら待っているのですが、心配というより、どこかワクワクした雰囲気なんですよね。そしてその瞬間が来たら、子供たちは一生懸命手を振って、運転士さんも警笛で応えてくれて……。長時間待ったのち、ドクターイエローが通過するほんの数秒で一気に盛り上がって、みんな笑顔で帰っていく光景。その一体感は忘れられません。

恵 検測走行中のドクターイエロー車内は、どんな雰囲気なのですか？

板垣 窓のカーテンを下ろしているので外は見えませんし、検測したデータに問題がないか、皆集中して業務を行っているので、

3号車のデータ整理室は検測員の控え室でもあり、普通の新幹線にはないものが置いてある ［右上］途中では降りられない仕事ゆえに電子レンジが大活躍 ［左上］大きなテーブルで食事もとれる ［下］新大阪駅で乗車の際は工務服に着替えるため、ロッカーも設置

てきた東京駅のホームが黒かったんです。何だろうと思って望遠レンズをのぞくと、「黒」の正体はドクターイエローを見送りに来た大勢の人々。その瞬間、全身が熱くなりました。

恵　到着番線とその周辺以外のホームは明るいでしょうから、不思議に思いますよね。

村上　私は最後の東京駅到着シーンを、運転席の窓にある「T4」の文字と一緒にどうしてもカメラへ収めたかったので、「ここで興奮して失敗しちゃダメだ、この感動は思い出して味わおう」と、自分に言い聞かせていました（笑）。今回、12月19日発売のドクターイエロー写真集（41頁参照）の制作にあたり、ラストランというドラマの最前線に立たせていただきましたが、この東京駅到着シーンは、私の写真家人生において過去にも未来にもないレベルのものかもしれません。

恵　「写真集」というとビジュアルを楽しむイメージがありますが、今回のドクターイエロー写真集は、ドキュメンタリー的な面白さがありそうですね。

村上　今回は「ドクターイエローを残す」ことを、メインに考えました。ラストランまでの物語、その熱気はもちろん、ドクターイエローで働いている人たちのリアルな姿を「写真集」という形で残すことにこだわっています。そのため、一刻も早くドクターイエローに関わる皆さんから仲間と思っていただけるよう、努力しました。

恵　まさに、ドキュメンタリーの手法ですね。

村上　走行写真であればファンの方々のほうが多く撮られているでしょうし、公式の写真集ならば何を残すべきか、公式じゃないとできないことをしよう、という考えで制作しています。撮影にあたってずいぶん無茶を言いましたが、現場の皆さんが普段どういう思いで仕事をされているのか、引退に向けてどう思いをつのらせていったのか、残すことができたと考えています。

そっと車体に触れる栗原検測員。彼らにとってT4は、機械ではあるがただの機械ではないのだろう

工務服は九州に行って戻ってくる

恵　その現場の板垣さん、ドクターイエローでの仕事を具体的に教えてください。

板垣　T4の乗務は、大井車両基地での準備に1日、東京駅から新大阪駅までの下り検測で1日、新大阪駅から東京駅までの上り検測で1日、あわせて3日間というスケジュールです。ドクターイエローの車両は山陽新幹線も走るのですが、乗務員は新大阪駅近くの鳥飼（とりかい）車両基地（大阪府摂津市）で、JR西日本さんの担当者と交代しま

会いに行こう！
歴代ドクターイエローを訪ねて白山、名古屋へ

引退したドクターイエローT4編成のうちの1両は、今年6月から名古屋市の「リニア・鉄道館」で保存・展示が始まった。そして、同館で人気を集めていた先代のドクターイエロー展示車両は、いま、石川県白山市に昨年オープンした「トレインパーク白山」で会える。

文＝清田勝哉 Seita Katsuya
写真＝三原久明 Mihara Hisaaki

[上] 乗務員用扉のガラスに書かれた「T3」の文字　[中] 車体後方の銘板には「日本国有鉄道」の文字も　[下] トレインパーク白山センター長の小山一徹さん。「0系新幹線をベースにしたこのコの鋼鉄製の車体は、近くで見ると本当に迫力満点で、その美しさを実感できると、地域やご来館の皆さんにも大好評です」

偶然、ドクターイエローのラストランを目撃してしまった。今年1月28日、近所の低山に登ったときのことだ。ドクターイエローは、約10日に一度、営業線を走行しながら、電気設備や軌道設備などの状態をチェック。その確かな検測データにより、新幹線の安全・安定輸送を確保する特別な列車だ。運行予定は公表されていないので、「会えたらいいことがある」とまで言われてきたドクターイエローのT4編成が、1月28日と29日に最後の検測に従事し、引退した。そのラストランとの出会いが、「いいこと」を運んでくれたのだろうか。数カ月後、石川県白山市の「トレインパーク白山」と愛知県名古屋市にある「リニア・鉄道館」に保存された、2両のドクターイエローを見学する機会に恵まれた。

トレインパーク白山

北陸新幹線をテーマにした体験型施設。入り口の右手で、T3-7号車が0系特有の愛嬌ある顔で出迎えてくれる。隣接する北陸新幹線「白山総合車両所」の見学エリア、大型立体遊具なども備えている

[円内]JR東海の社名が記されたT4の銘板　[上]リニア・鉄道館1階の車両展示スペースでは、白い車体の歴代新幹線に囲まれて、T4-7号車の黄色い車体が、ひときわ輝いて見える　[下右]展示開始後は大人気を博した　写真＝村上悠太　[下左]同館の入り口からエントランスに向かう小径には、今年6月に交代したT3とT4の各7号車への感謝の言葉を記した幕がはためいていた

005年には、T4編成とほぼ同仕様のT5編成（923形3000番台）が、T3編成の後継として導入された。

リニア・鉄道館に T4がやって来た

駆け足で振り返ってみたが、一方、T3-7号車と入れ替わって、名古屋のリニア・鉄道館にやってきたのが、1月に引退したばかりのT4編成、7号車（以下、T4-7号車）だ。リニア・鉄道館の1階、0系から700系までの新幹線車両が並ぶ一角にT4-7号車は鎮座し、館内の照明を浴びて、黄色い車体をキラキラと輝かせている。このT4-7号車がここに収まったのは今年6月のことだ。同館館長の岡部（おかべ）仁（ひとし）さんにうかがうと、引退後はすぐにリニア・鉄道館に保存すると、初めから決まっていたわけではないという。

「引退が分かってから、元々JR西日本様にお借りしていたT3-7号車を、T4に入れ替える方向で動きました」

T4編成は引退後、JR東海の浜松工場に入っていたので、T4-7号車はそこからリニア・鉄道館に運ばれた。だが、浜松工場と同館は線路でつながっているわけではない。そこで陸送となったのだが、なにしろ1両でも自重が約41トン、全長は約27メートルという大物だ（ちなみに、T3

地元にエール
これ、いいね！
Vol.093

小代焼

小岱山が育む、暮らしの器

熊本県荒尾市

文＝佐藤淳子 Sato Junko　写真＝須田卓馬 Suda Takuma

鉄を含む小岱山付近の土で作る小代焼は焼き締まるのが特徴。釉薬の流し掛けの美しさや硬さが食器として好まれる

「桐箱に器を入れるのは好きじゃないんですよ。父も僕も」。こう語る笑顔の若者は、熊本県北西部、小岱山麓にある窯元「小代焼 ふもと窯」の井上亮我さんである。修業先から実家の窯に戻って1年半。小代焼の第一人者である初代・泰秋さん、独自の作品でこの焼き物の知名度を高めた2代目・尚之さんに続く3代目として工房で焼き物に向き合う日々だ。

小代焼の起源は約400年前に遡る。小倉城主・細川忠利の熊本移封に伴い、移住した陶工が開窯したというのが定説だが、さらに遡り、熊本藩初代藩主・加藤清正の御用窯と結びつける説もある。いずれにせよ、複数の釉薬の流し掛けによる大らかな風合いの小代焼は、茶陶のほか普段使いの器としても愛されてきた伝統の陶器だ。

現在、窯元は荒尾市を中心に計11軒。「小代焼 ふもと窯」はその中で最大級の登り窯を持つ。2代目は、初代同様、子に自分の好きな道を進めと伝えてきた。しかし小代焼の風合いに通じる自由な環境の中、自身も3代目も自らの意志で他の窯で修業を積み、今、伝

2

3

1

建築トライアングルツアー

**旅に「建築」の視点を加えてみましょう。
建築には地域ならではの個性やこだわりがあり、
形や素材の理由を知ることで、地域の魅力はさらに広がります。
案内役は建築に詳しい画文家の宮沢 洋さんです。**

文・画＝宮沢 洋

写真＝荒井孝治

第02回

瓦がつなぐ古都の景観

奈良市

現代でもつくりにくい曲面

奈良といえば東大寺。東大寺といえば大仏さまだ。もちろん、大仏さま（盧舎那仏）は像高14・98mとんでもなく大きいが、訪れた人が最初に驚くのは大仏殿（金堂）の大きさと、屋根の美しさではないか。

高さ48・742m、幅（東西）57・012m、奥行き（南北）50・480m。屋根は2重構成で、寄棟の大屋根の下にスカートのような裳階が広がる形だ。にぶいグレーのいぶし瓦が約11万枚載っている。一般的な住宅に使う枚数の約100倍。かつ、平瓦の長さは一般的な瓦の約2倍、55cmだ。

この屋根を見て心を動かされるのは、

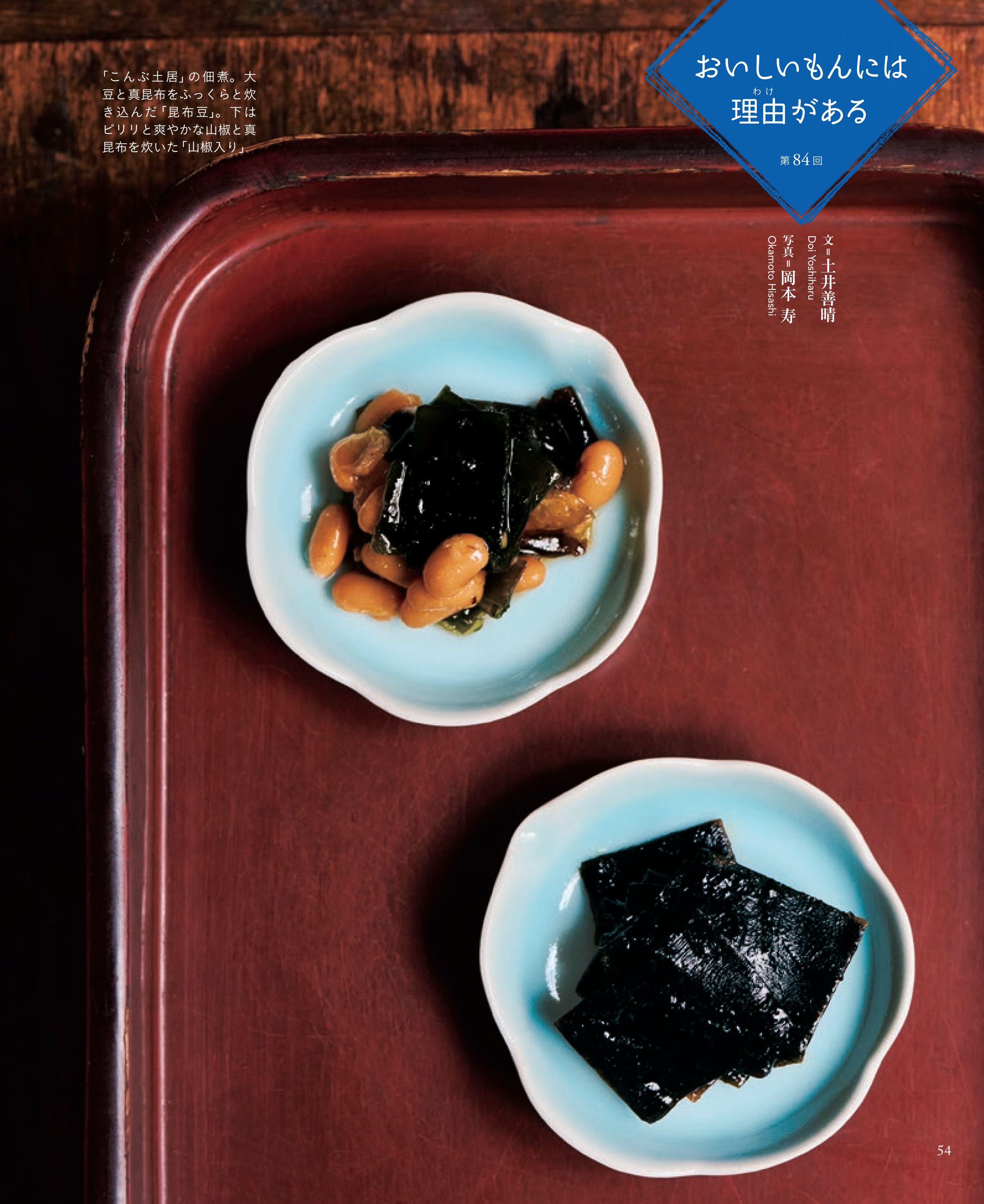
巡るのはココ！　奈良市

上写真［1］東大寺大仏殿の瓦は内部に展示されている　［2］奈良ホテル。廊下や客室から瓦屋根が見下ろせる　［3］なら100年会館のエントランスホールは外壁とつながっている

おいしいもんには理由（わけ）がある

第84回

文＝土井善晴
Doi Yoshiharu
写真＝岡本 寿
Okamoto Hisashi



「こんぶ土居」の佃煮。大豆と真昆布をふっくらと炊き込んだ「昆布豆」。下はピリリと爽やかな山椒と真昆布を炊いた「山椒入り」

大阪の味と昆布と

江戸時代、北前船によってもたらされた昆布は、大阪の食文化になくてはならないものになりました

《大阪府大阪市、堺市》

かつて大阪の料亭「味吉兆」で修業した土井さんも、「大阪のお料理に昆布は欠かせません」と、その重要性を語る。手にしているのは堺市にある「郷田商店」の手漉きのおぼろ昆布。削ったばかりのおぼろ昆布は羽衣のように軽く柔らかく、手に心地よい。いただいてみると、角の取れた酢の酸味にしなやかな舌ざわり。汁物に入れて昆布の香りを楽しむのも良し、白身魚や海老を包んでおけば、簡単に昆布締めが出来上がる

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学副学長。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』(ウェッジ)など著書多数。

今回は大阪の昆布です。まずは昆布のだしが効いたおうどんを食べようと向かったのはなじみの「道頓堀今井 本店」さん。この辺りは、芝居小屋がたくさんあったところです。そんなんで、今井さんは芝居見物のお客さんが来られるお店でしたから、店のつくりもお料理も、ちょっと華やかで気が利いて加減の良いお店です。飲食事業部総括部長の里出善信さんに、ここのおいしいおうどんやおでんのだしのことを尋ねたら、「うちは創業時からこれを使っています」と、ふんだんに使っている真昆布の束を抱えて見せてくれました。えっ、こんな上等なん使ってはるんですか。すみません、びっくりしました。近年海水温が上がったせいか、真昆布が取れなくなってこれからどうなるかと心配しておられます。

大阪の正月のお飾りは、お餅の上に置いた白板昆布をまっすぐ正面に垂らし、串柿(干し柿)を真横に置き、一番上に橙をお天道さんみたいに載せます。お煮しめに欠かせない昆布巻きは、身欠きにしんを芯に、日高昆布を巻き干瓢で結んだら、戻し汁に酢を落として、煮汁が半分くらいになるまでゆっくり煮ます。お雑煮は茹でた丸餅に昆布だしと白味噌のとろりとしたつゆで仕立てます。あっさりしたお雑煮が食べたくなると、火鉢で焼いた餅を椀に取り、おぼろ昆布を入れて鉄瓶の湯をさして、醤油を垂らせば、即、上等のお雑煮です。大阪は昆布が身近にあるのでお吸いもんが日常化して味噌汁を飲む習慣はあまりなくて、味噌の消費量は全国でも下位。まあなんやかんや言うても大阪は食べもんに贅沢な土地柄やと思います。

大坂を変え、支えた昆布の存在

17世紀前半、北海道・蝦夷地の昆布は、若狭(福井県)の港で荷揚げされ、陸路・鯖街道を通り貴重な献上品や商品として京都や大坂へ運ばれました。しかし1672(寛文12)年、河村瑞賢*によって西廻りの北前船航路が確立されると、状況は一変します。桁違いの量の昆布が大坂市場へ一気に流入し、「天下の台所」と称された大坂の経済力をさらに引き上げたのです。

この豊富な昆布は、まず商家の豊かな台所に広まり、大阪の食文化を根底から変え

＊[1618-1699]江戸時代前期の土木家。伊勢の貧農から身を起こし、江戸に出て当代屈指の材木商となる。幕命を受け、奥羽の官米を江戸に回送するため1670(寛文10)年に阿武隈川の河口から江戸へ向かう東廻り航路、1672(寛文12)年に酒田から下関を通り大坂・江戸へ向かう西廻り航路を整備